

つれづれなるままにイーハトーブの夏

中学二年 I・W

私はこの夏、岩手県八幡平へ家族旅行に行った。八幡平に行く途中、世界遺産である平泉中尊寺を巡った。長い坂道「月見坂」を登ると本堂に入り、金色堂に着いた。金色堂は名前の通り、ピカピカの金で光り輝き、装飾も夜光貝がちりばめられて、真っ暗闇でも光り輝く造りとなっている。この金色堂には、極楽浄土を現世で表しているという。

次に向かう場所は、雫石にある小岩井農場だ。私たち家族の旅の目的はもう一つある。イーハトーブの旅と名付け、宮澤賢治の生家の地を訪れてみて、お話の世界に触れてみようという事もねらいの一つだ。

そう、この小岩井農場は、そのねらいの一步となるように、美しい森や広大な牧場、かわいらしい牛舎や小屋が目の前に広がる。まるで、絵本の中にいるように感じる牧場だ。さっそく、新鮮な牛乳を飲んでみた。普通に牛乳が飲める人ならば、「おいしい、濃厚」と言えるが、私は、乳臭い、鼻にツンとつくような、おえっとなる味だった。次はソフトクリームを食べた。とても濃厚で美味しかった。お昼ご飯は、レストランで、チーズ入りのオムライスを食べた。これが東京で食べるオムライスの味とは、比べものにならない程、美味しかったのだ。母が「料理うんぬんではなくて、やっぱり素材が大事だね」と言った。この意味は新鮮で良い食材を使えば、料理上手になるということだと思った。私は「そうだね」とうなずいた。

八幡平へ到着したのは、夕方5時頃だった。インターを降りてからも山道をカーブしながらどんどん登る。人がひとりもない寂しい道で、見えるのは山・川・森・牛・鳥、上を見上げれば広大な空と大自然ばかり、岩手の空はとても大きくて雲がゆっくり流れている。私はただ眺めていた。ホテルに着いた。ホテルの前には南部富士と言われる大きな山、岩手山が見えた。山の姿は美しく、堂々としていて、雄大でたくましい恐ろしいような山だ。

次の日の朝、まだ夜明け前に目が覚めた。何故なら、雷が聞こえたからだ。私は窓の外をのぞくとキャーと言い布団をかぶった。目の前まで大きく岩手山が見えたような気がした。真っ白か真っ黒か灰色かの色が目に飛び込んだ。閃光がピカッと光った。ギャーと言いたま布団に潜り込んで目をつぶっていた。今までの中で一番の恐怖を感じた。まるで岩手山がごろごろころ、ぐずぐずっ、と喉を鳴らして唸り声を上げ、薄目で睨んだような気がしたからだ。絶対そうだ。

二日目は花巻に向かうので、外へ出た。岩手山は雲がかかっていた。私は、山に敬意を払った。今朝の恐い出来事以来、私は自然を敬い、その土地に生かされていること、崇めること。風習、信仰の精神が少しわかったような気がする。

「私達は東京から観光で来ました。どうか旅が安全に過ごせるようお守りください。」
私は心の中で祈った。

ごろごろと 喉を鳴らして 睨んでいる

恐ろしき山 岩手山の眼

花巻では、宮澤賢治記念館を観覧した。入り口に「写真撮影禁止」と書いてあったので焦っ

た。メモと記憶をしなければいけない。賢治の生涯と願い、思想、祈り、作品などが「科学」「芸術」「宙」「祈」「農」と五つの分野で分かれ、部門ごとに細かく展示されている。私が知っていることは、お話の「よだかの星」「注文の多い料理店」「銀河鉄道の夜」「風の又三郎」「セロ弾きのゴーシュ」くらいだった。まず、賢治の作品の中で共通することは、登場人物や世界は、日本なんだか西洋なんだか分からない、独特な場所である。「銀河鉄道の夜」では、ジョバンニ、カムパネルラなど、正直、ややこしい名前である。この謎がわかった。賢治は心の中で浮かぶ思想や世界観、祈り、願いなどを、心象スケッチといい、心の中の出来事の深い瞑想を描いていくという事だ。館内の展示には、いろいろと、難しいことばかり、小さな文字で賢治の作品についての構想など記してあるが、以外と簡単なことなのかもしれない。賢治は、岩手の大きな夜空を見上げ、草むらに寝ころびながらいつの間にか目をつぶり、うたた寝をしていたのに違いない。そして夢の中の出来事を物語にしたのだと私は思う。ただ賢治は浄土真宗を信仰する家に生まれて、(大人になつてからは法華経信者になる)農学校を出ている。物語の中に、天上に向かう人々が、聖歌のハレルヤを唱えているような、でも、よく見ると「ハレルヤ、ハレルヤ」だった。他にも、白い十字架とか、せいの高い黒いかつぎをしたカトリック風尼さんが、という表現もある。なので、聖歌風、ハレルヤ風なのかも知れない。そのように賢治は、自分の思想や宗派の変更や学びなども空想の世界をさらに広げていったのかもしれない。岩手山の山頂に登り、外国に意識を飛ばすことができたのかも知れない。もしかすると、宇宙と交信していたのかも知れない。

「銀河鉄道の夜」この列車の旅は、北十字星から南十字星に向かう。岩手の空は、夏の星座は天の川が美しくお盆の時期にはペルセウス座流星群が見られる。天の川中心には、こと座のベガ、わし座のアルタイル、はくちよう座のケンタウルス、さそり座がある。「銀河鉄道の夜」の物語の中にも、天の川の一部の暗黒星雲を石炭袋と表現している。ジョバンニとカムパネルラが十字架を見た後に、「あ、あすこ石炭袋だよ。その孔だよ。」とカムパネルラが指をさす。ジョバンニは天の川の大きな孔に大変驚き、その底がどれだけ深いかその奥になにかあるのか目をこすって見ている。ジョバンニが言った、「僕もうあんな大きな闇の中だって恐くない、きつとみんなの本当のさいわいをさがしていく、どこまでもどこまでも僕たち一緒にすすんでいこう」私が思うには、石炭袋はブラックホールだ。物語は天国へ行く旅のように、鉄道で空を上昇していく。地上の乗り物が銀河を走り異次元の世界へとかけていくような話だ。しかし私は気がついた。ケンタウル祭りや川へ流す烏瓜のあかりは、カムパネルラが水の底に深く引き込まれて溺れ死ぬ事を示しているのだ。話の中で「ジョバンニは、カムパネルラはあの銀河のはずれにしかないというような気がしてならなかった。」と書いてある。私はわかった。銀河のはずれは、水底に深く引き込み、天の川へと導いているのだ。それは、水と空を突き抜けていく、河なのか？銀河なのか？逆さまにしたり、背中合わせだったり、砂時計のようなものなのか？私は空想にふける。

次に向かったのは、北上川だ。北上川は、岩手県から宮城県に向かい北から南に流れている。賢治はイギリス海岸と名付けた。そう、ここは「プリシオン海岸」だ。私は宮澤賢治の物語のモデルとなった地をおとずれて、物語について深く考えていた。川でザネリを救い、自分は溺

れ死んだカムパネルラは、銀河鉄道の旅で「ほんとうのさいわい」とは何か問う。「ほんとうのさいわい」とはなんだろうか？人の為に死ぬることか？人の役に立つような人であることか？私はイギリス海岸に石を投げ入れながら、自分にとっての「ほんとうのさいわい」を考えていた。

イーハトーブはどこにもない。賢治が岩手の自然から感じた理想の郷なのか、賢治による造語だということがわかった。

岩手は夏でも冷たい風が時折、吹く。ぶつかり合う風の音、広大な空、ゆっくりと大きく変幻自在に流れる雲、どこまでも続いていく大地、真っ暗な闇には満天の星がのぞく。そして雄大で恐い山、岩手山。これらの大自然を眼の前になると、宮澤賢治の世界が相乗してくる。私は目をつぶって感じてみた。地上から空を見上げ、空から水を見て風から空を見上げ、水が流れるのを感じる。想像力がかきたてられ、いろんな方向に自分が舞っている。そう、そうだ私は確かに宇宙を感じ取れたのだ。

私は、この夏の旅で宮澤賢治の想う、「イーハトーブ」を確かに、体感することが出来たのだ。

—あとがき—

宮澤賢治の印象は、写真の撮るポーズ、物語に出てくる名前や名称、着ている服などから、西洋にあこがれる人のように感じました。

私は、この旅で平泉、小岩井農場、盛岡、花巻、イギリス海岸(北上川)、岩手山、岩手軽便鉄道だったJR釜石線路線を見てまわり、賢治の足跡をたどりました。私たちは車と電車で移動していましたが、移動距離が長いです。この長い距離を賢治は何もない時代に歩いて巡ったのでしょうか。そうとう足・腰の強い人です。やはり何か(未確認飛行物体・宇宙)と交信したり、各地に意識をとばしたりすることが出来る人だと確信しました。

参考文献・資料

岩手県花巻市

宮沢賢治記念館

宮沢賢治童話村

宮沢賢治イーハトーブ館

JR釜石線

銀河鉄道の夜

画本 宮沢賢治 作 宮沢賢治 画 小林敏也

制作 山猫通信社 パロル舎刊